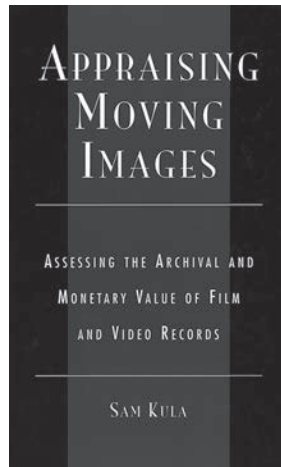


1

[書評 | review]

Sam Kula, *Appraising Moving Images: Assessing the Archival and Monetary Value of Film and Video Records*

兎玉優子 | Yuko Kodama



Sam Kula, *Appraising Moving Images: Assessing the Archival and Monetary Value of Film and Video Records*
Scarecrow Press, 2003, 155p, \$49.50

ギリスが「これほど記録され集められる時代も、またこれほど記憶することを強いられた時代もかつてなかった」[1]と述べるように、記録と記憶が注目を集める時代である。19世紀後期から相次いで誕生した録音、映画、ビデオ録画などの視聴覚メディアは急速な発展を遂げ、今では誰もが比較的簡単に安価に、“動いて話す”視聴覚ドキュメント[2]を作成することが可能になった。膨大に生み出され続ける視聴覚ドキュメントといかに向き合い、残すものと除外するものをどのように評価選別するかは、それらを専門に収集、保存する視聴覚アーカイブだけでなく、コンベンショナルなアーカイブズにおいても大きな課題である。本書は2003年に発行されたもので、著者のサム・クーラ氏もすでに故人となったが、学習院大学アーカイブズ学専攻で「視聴覚アーカイブ論」(アーカイブズ・マネジメント論研究III)の講義を担当させていただいたのを機に、ぜひ紹介したい。

本書のタイトルを仮に訳すとしたら、『動的映像を評価[選別]する——フィルムおよびビデオ記録のアーカイバルな価値と金銭的価値の評価[選別]]』とでもなるか。動的映像、すなわち映画とビデオ録画(その中でテレビ番組が大きな位置を占める)の、アーカイブズ(資料)として保存する価値があるかどうかの評価選別と、金銭的な価値の評価について論じたものである。実は、このタイトルを訳すだけでかなりの苦悶を強いられた。本書の内容は動的映像アーカイブとコンベンショナルなアーカイブズという二つの世界にまたがる上、アーカイバルな評価選別と、金銭的価値の評価という二つのテーマを取り上げている。“Appraisal”という語は、アーカイブズ学の分野においては「評価選別」だが、美術品や税制上の金銭的評価では選別を伴わないから、「評価」であろう。そこで本稿で両方合わせて指す場合

は、少々見苦しいが、「評価[選別]]」と表記することにする。また、「動的映像」は一般的な日本語ではないが、静止画ではない動く映像であることを明確にするため、あえて「動的」をつけることにする。

著者のサム・クーラ氏(Sam Kula)は1932年カナダのモントリオール生まれ。カナダ国立公文書館の手稿部門(Manuscript Division)で3年間勤務後、渡英して図書館学を専攻。そのまま英国にとどまり、ナショナルフィルムアーカイブでフィルムアーキビストとなった。その後、米国映画協会のアーキビストを経て、1973年からはカナダ国立公文書館に新設された国立フィルム・テレビアーカイブの初代所長として、カナダの視聴覚遺産保存の礎を築いた。彼の活動は国内にとどまらず、視聴覚アーカイブのなかった国々がアーカイブ施設を開設するのを支援し、国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)、国際テレビアーカイブ連盟(FIAT)の理事、動的映像アーキビスト協会(AMIA)の会長も務めた。退職後もコンサルタントとして視聴覚アーカイブ活動に貢献していたが、惜しくも一昨年(2010年)9月に逝去された[3]。

雑誌論文が多い彼の著作の中で、2冊だけ図書として刊行されたのが、ユネスコのRecords and Archives Management Programme (RAMP)の一環で1983年に発行された*The Archival Appraisal of Moving Images: A RAMP Study with Guidelines* [4](以下、RAMP Studyと表記する)と本書である。そして本書は実質的に、RAMP Studyを増補したものである。本書にRAMP Studyとの関連は明記されていないが、構成がほぼ同じで、RAMP Studyと全く同じ文章が随所に現れるのだ。もちろん2003年の現状に合わせて加筆修正はされているが、RAMP Studyを下敷きになっていることは明らかである。

本書の内容を見ていく前に、RAMP Studyの時代背景を考えてみよう。本書でクーラ氏が数回繰り返し書いているように、種々の視聴覚メディアが開発され、普及しても、なかなかコンベンショナルなアーカイブズにおける議論の対象になることはなく「無視されるか回避され」、一方、視聴覚アーカイブではアーカイブズ学の知識を持つアーキビストがほとんどいなかった[5]。1980年代初期は、ようやく国際アーカイブズ評議会(ICA)で視聴覚メディアへの取り組みが本格化する時期に当たる。ICAに視聴覚記録ワーキンググループが設置され、クーラ氏が初代委員長を務めた。また、1980年にはユネスコ総会で「動的映像の保護及び保存に関する勧告」[6]が採択され、国際社会でも映画、テレビ番組などの動的映像保存の必要性がようやく明確に認識されるようになっていた。視聴覚アーカイブとコンベンショナルなアーカイブズの接点が非常に少なかった時代に、両方のバックグラウンドを持つクーラ氏が重用されたであろうことは、想像に難くない。RAMPはユネスコによる長期的な記録・アーカイブズ管理プログラムで

あるが、その一連の刊行物の一つとして発行されたクーラ氏の著作は、それまで文献の空白地帯だった動的映像の評価選別の分野を埋めるものとなった。

RAMP Studyと本書の構成を比較すると、以下のとおりである。まず、表1で示すように、両者の構成は非常に似ている。目立った違いは、RAMP Study第5章「動的映像の記録管理と評価選別」が本書ではなくなり、逆に本書では第6章「金銭的評価」が加わっていることである。前者はごく短い章で、例としてチェコスロバキアのシステムを紹介していたのが、社会主義体制下で成立していたそのシステムも崩壊したため、本書では第2章で、かつて存在した、国産映画全作品のライフサイクルを管理していた理想的システムとして触れられている。後者については後述する。

もう一つの違いは、RAMP Studyでは第7章「まとめとガイドライン」となっていたのが、本書では「ガイドライン」の語がなくなっていることである。元々、ユネスコのRAMPプログラムは加盟国、特に発展途上国に対する支援の性格があり、動的映像の評価選別の分野でもそ

表1 ———— クーラ氏の2つの著書の構成の比較

<i>The Archival Appraisal of Moving Images</i> (RAMP Study), 1983	<i>Appraising Moving Images</i> , 2003
序章	序章
第1章 動的映像アーカイブの歴史と団体	第1章 動的映像アーカイブの歴史
第2章 アーカイブズ学的な基準と理論	第2章 評価選別理論
第3章 アーカイバルな動的映像の類型	第3章 動的映像の形態と機能
第4章 評価選別の方針と実務	第4章 評価選別の方針と実務
第5章 動的映像の記録管理と評価選別	第5章 関連ドキュメント
第6章 関連ドキュメント	第6章 金銭的評価
第7章 まとめとガイドライン	まとめ
参考文献	参考文献
	索引

れまでになかったガイドラインを提示し、手近に参照しやすくすることが、大きな目的だったと推測される。一方、本書では、クーラ氏自身がまとめて「私が試みたのは、動的映像の評価に有用と思われるガイドラインをいくつか並べることである」[7]と述べているように、彼自身が新たにガイドラインを提示するよりも、動的映像の評価[選別]の分野を概観し、すでに存在する諸々のガイドラインへと導く案内書を意図したのではないだろう。

では、本書の各章を順に見ていこう。第1章は映画の発明直後の1898年に映画保存の意義を指摘したマトシェウスキーから始まって、フィルムアーカイブ、テレビアーカイブ、それらの国際団体である国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)、国際テレビアーカイブ連盟(FIAT)などの小史となっている。評価選別という観点から語られる部分もあるが、動的映像アーカイブの歴史を知りたい人にも十分に役立つだろう。

第2章では、コンベンショナルなアーカイブズで確立されてきた評価選別の理論を紹介しながら、その動的映像への適用を論考している。例えば、ジェンキンソン(Hilary Jenkinson)、シェレンバーグ(T.R. Schellenberg)、クック(Terry Cook)、ハム(Gerald Ham)、デュランティ(Luciana Duranti)らの理論が挙げられているが、クーラ氏はこれらの理論から動的映像への目配りが欠落していることを批判している。そして彼は、これらの理論の中で動的映像にも適用できるものがあることと、それ以外にも動的映像に独自の判断基準があることを指摘していく。アーキビストが選別すべきかどうかというジェンキンソンとシェレンバーグの対立は、フィルムアーカイブの世界で起こったラングロワ(Henri Langlois)とリンドグレン(Ernest Lindgren)の対立と相通ずるところがあり、興味深い。ジェンキンソンらの理論を解説したのは、動的映像アーキビストにもアーカイブズ学の理論に触れ

させることを意図していると思われるが、限られた紙面のため簡単な解説にとどまる。読者は本書を読み進める前に各論文に目を通せば、章の後半の理解がより深まるだろう。

第3章はごく短い章で、動的映像におけるプロビナンスの考え方(シリーズとしてのまとまりや、関連ドキュメントとの一体性)、形態(フィクションとノンフィクション、実写とアニメーション等)や機能(プロバガンダの一環で作られたものや、科学研究の記録等)について述べられている。この章に限らないが、動的映像の評価選別を考えるには、映画やテレビ番組の個々の作品の知識は必ずしも必要ではないけれども、映画やテレビ番組がどのように制作されるか(撮影から視聴までの仕組み、特にオリジナルネガから上映用プリントまでのフィルムの代(generation))、その過程でどのようなドキュメントが生み出されるか(完成版だけでなく、予告編や使われなかった部分、そして第5章で詳しく論じるシナリオ、契約書等の関連ドキュメント)の基礎知識は必要である。

第4章では、現在の動的映像評価選別の考え方に大きな影響を与えている前述のユネスコ勧告と、国際テレビアーカイブ連盟(FIAT)のテレビ番組保存基準 *Recommended Standards and Procedures of Selection and Preservation of Television Programme Material* を解説した後、米国、オーストラリア、ロシア、アルゼンチンなど、類型となるいくつかの国の動的映像の選定基準や収集基準を紹介している。ここではFIATの基準に注目したい。未来の人が何を必要とするかは予測不可能だから、全て残すことが理想的という考え方がある。しかし、「一つの放送局が一年間に5,000時間以上の番組を生み出すことも珍しくない」[8] テレビアーカイブにおいては、選ぶことは避けられない問題だった。そのために作られたFIATの基準であるが、放送局のアーカイブのための判断基準だけでなく、非営利のテ

レビアーカイブ(主に放送局の外にある収集アーカイブ)のための判断基準も併記している。

第5章で取り上げる関連ドキュメントには、映画やテレビ番組の制作過程で生み出されるプロダクションファイル(契約書や書簡、撮影記録等)、シナリオ、デザイン画、アニメーションの素材等と、それらがいかに視聴されたかに関連する予告編、ポスター、広報資料、新聞・雑誌記事等の両方が含まれる。RAMP Studyの時代にはなかったDVDの特典映像や、デジタルファイルとその関連ソフトウェアについても新たに言及されている。関連ドキュメントのうち、写真やシナリオ、ポスター等はオークションで取り引きされる対象でもあり、次の第6章でも詳しく論じられる。

第6章は、動的映像の金銭的評価について、本書で新たに書き加えられた章である。その背景には、米国やカナダで民間所在の文化財の共有化を推進するため、文化財をアーカイブズや博物館などの文化保存施設に寄贈した者に対する税制優遇策が始まったことがある。税額の決定のためには文化財がどれぐらいの金銭価値を持つかが評価することが必要になり、視聴覚関連の寄贈に関しては視聴覚アーカイブのバックグラウンドを持つ人々が評価に関わるようになった。

本書では、文化財・美術品一般についての金銭的評価の方法論や評価者の専門家団体、倫理綱領、アメリカとカナダの税制上の手続きなどを解説し、動的映像分野の例として二つの例を挙げている。一つはケネディ暗殺を偶然写したゼブルダーフィルムの国立公文書館への所有権移行に伴う補償金問題で、様々な評価者が示した大小様々な評価額を詳述し、公正な市場価値、交換価値、比較価値など、金銭的評価の様々な概念やアプローチを示していく。もう一つの例はアニメーションの制作時に発生する大量のセル画や背景画、原画など

である。取り引きされる市場は確立されているが、1枚1枚が全て同等の価値を持つわけではないことや、市場で取り引きされる金銭的価値の評価と、アーカイブ機関で長期保存の前に行うアーカイバルな評価選別は異なること等が述べられている。日本でも文化庁が「美術品等の流動性を高める」ために、美術品の寄付に関する税制優遇策があるが^[9]、相続税法の制度では美術品で納税する物納は金銭や不動産による納税よりも優先順位が低い^[9]ため、十分に機能していないようである。

クーラ氏のカナダの同僚たちが寄せた追悼記事^[10]によると、彼は退職しようやくこの金銭的評価という難しい大きなテーマに取り組む時間を得て、本書を執筆した。さらに、テレビドキュメンタリーシリーズ(カナダの子どもの暮らしの歴史がテーマで、ホームムービーを多用している)に関わったことから、フィルムと金銭について一層考えるようになった。このテーマでもう1冊の図書を書き始めていたが、未完のまま亡くなったとのことである。

巻末の参考文献にも触れておきたい。動的映像アーカイブ、映画・テレビの分野から、図書館情報学、アーカイブズ学の分野まで、幅広い文献のリストが17ページも続いている。これは、クーラ氏の1960年代以来の長年の蓄積^[11]の賜物である。私事であるが、この参考文献リストを手掛かりに入手して、私の知識を広げてくれた文献は数えきれない。クーラ氏の言論が、現場経験で得たことだけでなく、これだけ幅広い知識に裏打ちされたものであったことを改めて認識した。

本書の発行からすでに9年が経過し、映画やテレビ番組の制作も、視聴者に届けられる方法も変わってきた。例えば、広報手段としてデジタルサイネージがはじまり、紙のポスターは減少しつつあるという。シナリオは、関係者によるオークションサイトへの出品が問題になっ

たため、撮影後に回収するなど、管理が厳しくなってきた。劇場用映画やテレビ番組の公式ウェブサイトにも重要な情報が掲載されているが、いつ誰が保存すべきなのだろうか。また、一般市民が簡単に撮影し、動画投稿サイトで多くの人に視聴されて集合的記憶の一部となる事例も生まれてきた。クーラ氏のご存命なら、これらの変化に対してどんな考えを提示してくれたのだろうか。

評価選別には多角的な観点が求められる。裏返せば、動的映像の評価[選別]について書かれた本書は、動的映像に接する上での様々な観点を提示してくれているということになる。すでに動的映像保存の実務に様々な立場で関わっている方にも、これから動的映像ドキュメント、動的映像アーカイブについて学びたいという方にも、手に取っていただきたい一冊である。

- 1 — Gillis, John R., 'Introduction: Memory and Identity: The History of Relationship', in John R. Gillis ed. *Commemorations: The Politics of National Identity*, Princeton University Press, 1996, p. 14.
- 2 — *Documents That Move and Speak: Audiovisual Archives in the New Information Age: National Archives of Canada, Ottawa, Canada, April 30, 1990-May 3, 1990: Proceedings of a Symposium Organized for the International Council of Archives by the National Archives of Canada*, Munchen, K.G. Saur, 1992, 318 p. のタイトルより。
- 3 — 筆者も映画保存協会のメールマガジンに追悼文を寄稿した。以下のウェブサイトに掲載されている。<http://www.filmpres.org/archives/840> (accessed 2012-01-22).
- 4 — Kula, Sam, *The Archival Appraisal of Moving Images: A RAMP Study with Guidelines*, Paris, Unesco, 1983, 130p.
- 5 — 本書, p. 47.
- 6 — 文部科学省による仮訳「動的映像の保護及び保存に関する勧告」が、以下のウェブサイトに掲載されている。<http://www.mext.go.jp/unesco/009/004/026.pdf> (accessed 2012-01-22).
- 7 — 本書, p. 127.
- 8 — 本書, p. 18-19.
- 9 — 文化庁「美術品等に係る税制優遇措置について」http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/kondankaitou/housaku/zeisei_sochi.html (accessed 2012-01-22).
- 10 — Bergeron, Rosemary; Hackett, Yvette, 'Obituaries: Sam Kula, 1932-2010' *Archivaria* No. 71, 2011, pp. 173-177.
- 11 — クーラ氏がまとめた書誌として、Sam Kula, 'Literature of Film Librarianship', *Aslib Proceedings* Vol. 14, No. 4, 1961, pp. 83-93. および Sam Kula, *Bibliography of Film Librarianship*, Library Association, 1967, 68p. などがある。RAMP Studyの参考文献リストも32ページにわたる。